

第50回 小島三郎記念文化賞

推薦者の言葉

わた なべ はる お
渡 邊 治 雄
Haruo WATANABE

第50回小島三郎記念文化賞を受賞されました中谷比呂樹博士、おめでとうございます。

現在、西アフリカを中心に発生しているエボラ感染症に多くの関心が集まっております。エボラ感染者数は指数関数的に増加しており、米国CDCの推計では来年初めまでに効果的対策が打たれないと患者数は最大140万人に達し、その死亡率は70%にも及ぶとされております。医療制度がしっかりしている米国等の先進国では2次感染は起こらないはずであると考えられていましたが、その米国でも2例の2次感染者が発生しました。

わが国においてもこの27日夕方 リベリア滞在の男性が羽田空港に到着後発熱症状を訴え、エボラの可能性があるということで国立国際医療センターの隔離病棟に収容されました。血液検体が国立感染症研究所村山分室に搬送され、エボラウイルス遺伝子の検出がPCR法で行われました。幸い陰性という結果が得られ、国民一同が安堵した次第です。

感染症はもはや一国の問題ではなく世界の問題と

なっております。

第50回小島三郎記念文化賞を受賞されました中谷比呂樹博士は、まさに世界の感染症をコントロールする司令塔の役割を果たしているWHOにおいて、事務局長補として「エイズ・結核・マラリアの制御」の総責任者として活躍されておられます。

中谷比呂樹博士は、大学を卒業、臨床研修終了後、国内外の衛生行政に一貫して携わってこられました。「日本の公衆衛生を世界基準で、世界の公衆衛生への貢献」を胸に、活動を続けてこられたと承知しております。厚生労働省においてエイズ疾病対策課長、結核感染症課長、厚生科学課長、障害保健福祉部長等の国内行政における数々の要職をこなされながら、難病対策の政策的評価や障害者自立支援法において導入された障害区分について英文論文として日本の公衆衛生の現状を世界に向けて発表されてきております。また、国内・国際活動の両立は難しいと言われる中、中谷博士は、両者は、共通するところが非常に多いこと、即ち、対象が社会的な弱者



小島三郎記念文化賞贈呈式全景

であり、その支援のため公衆衛生という普遍的な手法を用いることで、人類に貢献できるとの信念のもと活動されてきております。その博士の理念が大きく花開いたのは、2007年に「エイズ・結核・マラリア」担当の世界保健機関事務局長補（Assistant Director-General）に就任された時であります。事務局長補は、WHO事務局長を補佐して、担当分野の対策を世界的規模で進める技術上の総責任者で、博士は現事務局長マーガレット・チャン博士の信任が厚く、同事務局長が就任後、継続して支え続けておられる唯一の事務局長補となり今日に至っております。博士は途上国で猖獗^{しょうけつ}を極めていた、「エイズ・結核・マラリア」に悩む人々を救うため、限られた資金を効果的に使う世界戦略を立て、最も効率的で有効かつ廉価^{れんか}な診断・治療を提供する為の診断・治療指針を作成されました。博士は、既存の戦略や指針を確実に実行するとともに、新たな戦略や指針を定めて実行されてこられました。2011年のWHOエ

イズ対策世界戦略、2013年の抗レトロウイルス薬総合治療指針、2014年の新結核制圧世界戦略がその一例であり、それらは、世界エイズ、結核、マラリア基金や二国間援助の資金により途上国で実施されております。その成果は、3大感染症の罹患率・死亡率の著しい減少に至っております。また、熱帯病という、途上国の中でも一番貧しい人々を悩ます Neglected Tropical Diseases の対策にも取り組み、2012年には対策ロードマップを定め、製薬企業から医薬品供与を取りつけ、メジナ虫症では撲滅、ハンセン病やフィラリア症などでは公衆衛生上の心配がなくなる目前の段階まで達成させております。

これらの中谷博士の世界的な貢献は、若い世代の国際活動への刺激にもなるものであり、まさに小島三郎記念文化賞に値するものであると考え、推薦申し上げます。

このたびの受賞、誠におめでとうございます。

(2014年10月31日収録)